『延慶本平家物語』に於ける漢字表記語のよみと意味について

――「心地」を中心に――

栞竹民

一、はじめに

『延慶本平家物語』は「所謂和漢混淆文の上乗なるもので」、「そのよく漢語を用ゐて国文に調和せしめたる伎倆はわが文章史上に於ける偉観なり」と、山田孝雄博士著の『平家物語』の序説で、評されている。そこには多種多様の漢語が使用されている。その漢語に関して、いままでいろいろな角度から研究が行われてきた。[1] しかしながら、なお研究を要する課題が残っている。その一つとして、漢字で表記されている語は果して漢語であるのか、さらにそれを如何に読むのか、という点である。それは『延慶本平家物語』の研究に於いて、避けて通ることの出来ない問題の一つである。小論で取り上げた漢字表記語「心地」はその一例である。『延慶本平家物語』から合せて84例(『心地観経』という固有名詞の「心地」二例を除く)の漢字で表記されている「心地」が検出できたが、そのよみを判明できる仮名注記、連続符、聲点、借音表記などの手がかりがないのである。そこで、84例の漢字表記語「心地」は如何に読むか、漢語と認定され得るか、という問題が生じてくる。

二、『延慶本平家物語』に於ける漢字表記語「心地」のよみについて

まず、問題点として、次の『延慶本平家物語』の漢字表記語「心地」を例示して、そのよみについて検討を加える。

(1)冷キ木蔭ヲ行時ハ九品ノ鳥居ヲ只今トヲル思ナシ大キナル木ノ本ニ立寄テハ上品上生ノ心地発心門トモ観念ス　(第一末85オ⑩)

(2)一日背世之憂已闇心地之月ニ百年僧老之契不異ナラ夢露之花ニ　(第二末7オ④)

(3)日ヲ経ツヽ思食沈ミテ供御モハカ〳〵シクマヒラス御寝モ打解テナラス常ハ御心地ナヤマシトテ夜ノオトヽニノミオハシマセハ　(第二本102ウ⑧)

(4)祭文讀畢リニケレハイツヨリモ信心肝ニ銘シ五躰ニ汗イヨタチテ櫨現金剛童子ノ御影響忽ニアル心地シテ山風スコク吹ヲロシ木々ノ梢モサタカナラス木葉カツチリケルニ　(第二末91オ⑤)

とある。右の四例の漢字表記語「心地」はいずれも「ココチ」とも「シムヂ」とも読む可能性が存するようである。一体「ココチ」と訓よみするのか、それとも「シムヂ」と音よみするのか、以下それ

について考えてみたい。

まず、古辞書と『延慶本平家物語』以前の古文献では、「心地」は如何に読まれているか、果して「ココチ」と「シムヂ」と読み分けられているのかをみてみよう。

『易林本節用集』
心地（コヽチ）　（言辞160③）　心性（シムシヤウ）—地（ヂ）　（言辞216②）

『久遠寺蔵本朝文粋』
託二其根於心地一　（十一巻138⑩）

『光長寺宝物集』
昨日ニ今日マサル心（コヽ）チシヲキタリケルニ　（巻一21⑦）

『梅沢本栄花物語』
いきて身なからあらぬここ地せしかな　（五30③）

『醍醐寺蔵探要法華験記』（嘉禎二（1237）年加点）
即（ち）附二子（番草の名字）を食す然（り）雖（も）更に心地（ダヽども）損（はれ）不　（105下③）

（その点図に依れば「心地」に付いている合符は訓合符であることがわかる）

とある。右の示すが如く、古辞書と古文献では、「心地」という漢字表記語は確かに「ココチ」と「シムヂ」という二通りのよみが存することが明らかになる。

では、『延慶本平家物語』の「心地」はどう読むであろうか。まず、問題点の例(1)の「心地」のよみを検討してみたい。佛教的匂いが漂っている文脈であると思われる。文中の「上品上生ノ心地」は「九品」と対応し、「鳥居」は「発心門」と対応している。「九品」は『観無量寿経』に説く九品往生のことをいう。佛教用語と考えられる。その「九品」と対応する「上品上生ノ心地」は九品往生の一つで、極楽の九階級の最高級のことをいう。また、上上品ともいう。それで、文中の「上品上生ノ心地」は佛教用語と考えて支障がなかろう。佛教用語としての「上生心地」は『最明寺本往生要集』に

如來ノ勸進（シタマヘルニ）　兜率答此（ソレ）亦无違（シスルコト）　誰遮（カサセム）上生心地　（165④）

とみえている。なお、『往生院本選擇本願念佛集』にも

兜率（ツ）西方二教住滅前後者（トハ）　謂上生心地　（108④）

とある。特に『往生院本選擇本願念佛集』に於ける「上生心地」は音合符が付いていることから「ジヤウシヤウシムヂ」と音よみすると思われる。佛教用語だから恐らく呉音よみであろう。呉音資料といわれる『法華経音訓』では、

・心（シンコヽ）（ムネ）（ナカコ）　ホシ　4 2 3
・地（チ）（ツチ）（ヒ）：（カワル）（タイ）（ヤスシ）　1 5 4 2

となる。「心地」の呉音よみは「シムヂ」となる。なお、「心」の韻尾は『新訂韻鏡』の示すように、

心内轉第三十八開深攝齒音四等平 -iəm

「m」となっている。それで「心地」は「シムヂ」と呉音よみすることになる。『往生院本選擇本願念佛集』と同じ佛教用語としての『延慶本平家物語』の「上生ノ心地」は「ジヤウシヤウノシムヂ」と呉音よみするのが妥当であろう。

次に問題点の例(2)を検討してみよう。実は、その例(2)とほぼ同じ文脈が『久遠寺蔵本朝文粋』にも見られる。それを挙げてみれば、

一旦（タレノ）背（ソムク）世（ヘヲ）之憂（コシ）已殘ニ心地之焰（ホノオ）百年偕老之契不ニ異ニ夢路之花一　（爲二中務卿親王家一室二卅九日願文　巻14 281⑭）

とある。両者の成立時代から考えれば、『延慶本平家物語』の例(2)は『久遠寺蔵本朝文粋』を出典とするともいえよう。『延慶本平家物語』が『本朝文粋』を典拠とすることについて、已に先学研究[2]に指摘されているのである。ここで注目されたいのは『久遠寺蔵本朝文粋』の「心-地」についている音合符のことである。『久遠寺蔵本朝文粋』に使用される音合符に関して、その先行研究[3]によれば、上下の漢字のほぼ中央を結ぶ音合符は漢音よみを示すものである。それに対して、上下の漢字の右側を結ぶ音合符は呉音よみを表わすものであるとされている。それに基づいて、『久遠寺蔵本朝文粋』の「心-地」に付いている音合符は「心」と「地」のまん中に位置するため、漢音よみを示すものであることがわかる。「心地」の漢音よみについて、漢音資料といわれる『長承本蒙求』を調べると、

郭弈心醉(シム)(114)　長房縮・地(チ)(115)

の如く、「シムチ」となる。呉音よみと異なって「地(チ)」が濁らないようである。『久遠寺蔵本朝文粋』を典拠として成立したと思われる『延慶本平家物語』の例(2)の「心地」は「シムチ」と漢音よみするのが適当ではないかとみられる。

次に問題点の例(3)を考えてみよう。文脈からみれば、例(1)(2)と違って、和文的な文脈である。例(3)の「心地ナヤマシ」と同じ表現が『梅沢本栄花物語』にもみられる。たとえば、

大殿の御ここちなやましうおほしたれはよろつにおそろしきにて　(三29①)

十二月になりぬ宮の御心ちなやましうおほされて　(七3⑩)

この牛ほとけなにとなく心地なやましけにおほしけれは　(二十五9⑳)

とある。右の三例の示すように、『梅沢本栄花物語』の漢字表記語「心地」が「ココチ」と訓よみされていることがわかる。文脈をも考え合せると、『延慶本平家物語』の例(3)の漢字表記語「心地」は例(1)(2)の音よみと異なって、和文の『梅沢本栄花物語』と同様「ココチ」と訓よみするのが妥当であろう。

次に問題点の例(4)をみよう。文脈としては例(3)と違って仏教的なものであるが、それと同じ佛教的文脈と思われる『梅沢本栄花物語』では、「心地シテ」という表現が

かの釋尊入滅のここちして大師入滅我隨入滅と橋梵波提かいひて水になりてなかれん心地する人いとおほかり　(三34⑩)

のように、「ココチ」と訓よみされている。そこで、『延慶本平家物語』の例(4)の漢字表記語「心地」は『梅沢本栄花物語』のと同じ、「ココチ」と訓よみする方が妥当ではないかと考えられる。

以上の考察によって、『延慶本平家物語』に於ける漢字表記語「心地」は音よみ(呉音よみ「シムチ」、漢音よみ「シムチ」)と訓よみ(「ココチ」)という二種三通りのよみが存することが明らかになる。

では、何故一つの漢字表記語「心地」が音、訓二通りのよみを有するのか、また、そのよみの異同が両者の意味に関わってくるか否か、以下、その点を巡って検討してみたい。その方法として次のように考えている。つまり、まず、『延慶本平家物語』成立以前の文献に於ける「心地」の使用状況をジャンル別に精査して、その意味を記述する。その上に、『延慶本平家物語』での「心地」の意味を分析、記述する。それによって得られた意味を綜合的に比較して、両よみ(音よみと訓よみ)の意味の異同と受容を求めるという方法

である。なお、日本文献の分類は桜井光昭氏の『平家物語』にみる和漢混淆現象[4]という論文を参照して行なった。

三、和文に於ける「心地」のよみと意味

以下、平安時代の和文資料に於ける漢字表記語「心地」のよみと意味について、『梅沢本栄花物語』を中心に、検討を加えよう。次の例をみよう。

(1)との、御心地にもさもやとおほしける人まいりたまひて　（二2③）

(2)公家の御心ちにも又女院の御夢なとにもこの事とかなかるへきさまにおもはせ奉らせ給へ　（五5②）

(3)かくて前斎宮いとわかき御ここちにこのことといときにくくおほえさるれは　（十三1③）

とある。例(1)(2)(3)の示すように、漢字表記語「心地」は「ココチ」と読まれ、「ココチ」という和語の漢字表記であることが明らかになる。その意味について、例(3)を検討してみたい。「御ここち」を修飾する属性を表わす形容詞「わかき」と「御ここち」と共起する思惟などの人の心の働きを示す述語「おほえさる」及び「御ここち」に付いている抽象的な場所を示す助詞「に」を合せて考えれば、「御ここち」は（前斎宮のわかい）心を表わす意味として用いられる。例(1)(2)も例(3)と同じ、俗世にいる一般の人間の心を示す意味に用いられると思われる。次の例をみよう。

(4)君たちのとしころの御心地むつかしうむすほほれたまへり　（二16⑯）

(5)御心ちさはやかにならせ給ぬれはとのの御まへうへなとうれしくおほしめされたり　（十二14⑨）

(6)松のこすゑもすこしいろかはりてここちよけなるに　（十四8⑫）

(4)(5)(6)の示すように、例中の漢字表記語「心地」は例(1)(2)(3)と同様、「ココチ」と読まれ、「ココチ」という和語の漢字表記であろう。例(4)の「心地」の意味を考えてみよう。「心地」と共起する述語「むつかしうむほほれ（たまへり）」がいつも「気持が晴れ晴れしくないとか鬱陶しいとかいう意味を示す。「御心地むつかしうむすほほれたまへり」は（君たちのとしころの）御気持が晴れ晴れしくない」という意味を表わすと思われる。「心地」は何かによって伴ってくる人の心の状態を示す意味に使われる。例(5)(6)も同じであろう。次の例をみよう。

(7)五月十一日よりここちまことにあやしうおほえけれはそのつとめてむすめとものいへにいきて心地のあやしうおほえはへれはくるしうなるは　（四32⑯）

例(7)の示すが如く、文中の漢字表記語「心地」は「ココチ」と読まれ、和語「ココチ」の漢字表記であろう。その意味を分析すれば、「心地」と共起する述語「あやしう」と後接文の「くるしう」の示す意味から、「心地」は人間の生理的気分という意味を表わすと考えられる。つまり「気分がよくない、くるしい」という意味であろう。次の例を検討してみよう。

(8)ほりかはとの御心地いととをもりてたのもしけなきよしを世に申す　（二9⑳）

(9)御心ちもやうやうおこたらせ給へはうれしくおほしめさる　（三十七3⑲）

(10) 関白殿の御ここちいとおもし四月六日出家せさせたまふ　（四23⑮）

右の三例の示すように、漢字表記語「心地」は「ココチ」と読まれ、和語「ココチ」の漢字表記であることが明白となる。その意味としては、「心地」と共起する述語「おもる」がいつも「病気、病状が重くなる」という意味を表わすことと下接する「期待できない或いは助けようがない」という意味を表わす「たのもしけなき」表現とを考え合せれば、例(8)の「御心地」は「(ほりかはとの)ご病気或いはご病状が(一層重くなって)」という意味として用いられるとみられる。(9)(10)も(8)と同様、人間の病気(或いは病状)を表わす意味に使用されている。人間の病気(或いは病状)という意味を表わす和語「ココチ」が訓点資料にも見られる。たとえば、『図書寮本日本書紀』[5]には、

天皇得ー病(オホムココチソココナヒタマヒト)還入於宮　（巻第二十一22㊶）

とある。文中の「天皇得ー病」に対して「オホムココチソココナヒタマヒ」と訓読されている。「オホムココチ」の「オホム」は天皇に対する尊敬の意を示す接頭辞「御」である。それは例(8)の「ほりかはとの御心地」の「御」と同じ機能を成している。「オホムココチ」の「ココチ」はほかでもなく「得ー病」の「病」に対しての訓である。いわば、「ココチ」は「病」を示す意味として用いられることであろう。その「ココチ」は漢字で表記されても「ココチ」としての本来の意味が変わらないであろう。次の例は「心地ナス」というサ変動詞形のものである。このサ変動詞「心地ス」は『梅沢本栄花物語』に於いて、多用されている。317例の「ココチ」の中で105例を占めている。以下、その「心地ス」の意味を検討してみよう。

(11) 大納言かくときくにむねふたかるここちして物をたにもくはすなりにけり　（一7㉑）

(12) 夢のうつつに成たる心ちせさせ給ことかきりなし　（五27⑩）

(13) 其上のいきの松原いきて身なからあらぬここ地せしかな　（五30③）

(14) 右大殿うせ給にけり九十をしも侍給へる心地してあはれなり　（三十六22③）

右の四例の示す如く、漢字表記語「心地」は「ココチ」と読まれ、和語「ココチ」の漢字表記であることが明瞭となる。その意味を分析するために、例(11)を検討してみよう。例(11)の文構造から見れば、大納言が「かくときく」ということによって、「むねふたかるここちして」という後接文を伴ってくるのである。さらに、「物をたにもくはすなりにけり」という文にも連がることになる。「ここちして」は大納言が「かくときく」ということによって自然に「むねがふさがるような感じがして」という意味を表わすと思われる。(12)(13)(14)も(11)と同じ、何かによって自然に伴ってくるそういうような感じがするという意味として用いられるであろう。

右の考察で、和文である『梅沢本栄花物語』に於ける漢字「心地」で表記されている和語「ココチ」はその意味を次のように記述することができよう。

(一)一般の人間の心(知、情、意の三方面の知を中心に)
(二)何かによって伴ってくる人の心の状態
(三)人間の生理的気分
(四)人間の病気(或いは病状)
(五)その人が何かによって自然に伴ってくるそういうような感じ

（がする）

と五つに大別できるようである。その分類に基づいて、『梅沢本栄花物語』の残りの例と同じ和文の他の文献の「心地（ここち）」を意味分類すれば、次の表㈠のようになる。

（表一）

考察対象	意味	竹取物語	伊勢物語	土左日記	大和物語	宇津保物語	落窪物語	かげろふ日記	平中物語	枕草子	源氏物語	和泉式部日記
心地（ココチ）	㈠ 一般の人間の心	1			3	15	4	9	1	6	38	
	㈡ 何かによって伴ってくるその人の心の状態	2	1	1	2	72	20	28		22	125	3
	㈢ 人間の生理的気分	3		2	1	15	15	11		5	99	2
	㈣ 人間の病気（或は病い状）	1	1			3	4	2		5	28	
	㈤ その人が何かによって自然に伴ってくるそういうような感じ（がする）	6	1	1	10	93	24	53	1	38	388	9
計		13（心地ス 4）	3（心地ス 1）	4（心地ス 1）	16（心地ス 7）	198（心地ス 70）	67（心地ス 22）	103（心地ス 28）	2（心地ス 1）	76（心地ス 25）	678（心地ス 407）	14（心地ス 8）

紫式部日記	大鏡	栄花物語	狭衣物語	夜の寝覚	更級日記	合計
2		21	9	8	1	118
7	5	55	42	48	12	445
1	9	64	32	34	2	295
	5	72	36	55		212
12	16	105	141	140	8	1,046
22（心地ス 10）	35（心地ス 8）	317（心地ス 57）	260（心地ス 114）	285（心地ス 79）	23（心地ス 3）	2,116（心地ス 845）

（注、（　）の数字は当文献のサ変動詞「心地ス」の用例数を示す）

なお、品詞という観点から見れば、表(一)の示す如く、和文に於いては「心地す」というサ変動詞形が多用されている。これは和語「ココチ」の一特徴ともいえよう。また、名詞といっても、尊敬の意を表わす接頭辞「御」の付く「御心地」という名詞形もみえる。これは右に挙げた『梅沢本栄花物語』の例を見ればわかることになる。

右の考察によって、和文に於ける漢字表記語「心地」は単に和語「ココチ」の漢字表記にすぎないことが明らかになる。たとえ「心地」という漢字で表記されても、和語「ココチ」としての意味は変化しないであろう。「心地」と「ココチ」とは和語と、それに対応する漢字表記との関係である。

四、日本漢文に於ける「心地」のよみと意味

已に以上の考察によって明らかになるように、漢字表記語「心地」は二通り（音よみと訓よみ）のよみを有するのである。では、日本漢文の「心地」は如何に読むのか、それを明らかにするのには、次のような方法が有効ではないかと考えられる。つまり、まず日本漢文に於ける「心地」のよみを判明できる連読符、聲点などが付いている文献を手がかりにして、その文献に現われる「心地」の意味を記述、分類して、その上、その分類に則って、他のよみ不明の文献に於ける「心地」の例を意味分類する。さらに、その意味分

類によって得られたよみのわかる「心地」とよみの不明の「心地」との意味を比較して、よみの不明の方がよみのわかるのと意味が重なるならば、そのよみのわかる方と同様であると判定されるという方法である。無論、比較するに際して、比較対象となる文献の時代のことを考慮に入れておく必要があるのである。以下、右の方法を以って日本漢文に於ける「心地」のよみと意味に検討を加えてみよう。今回、管見に入った日本漢文では、そのよみを判明できる手がかりを持っている文献は『久遠寺蔵本朝文粋』の四例の「心地」のみである。その四例の「心地」はいずれも音合符の付いているものである。次にその四例の中の二例を挙げて検討する。

(1) 一旦背(タレソムク)〉世之憂已殘(ノコシ)心地之焰(ホノオ)百年偕老之契不異(ナラ)リ

夢路之花」（爲中務卿親王家室冊九日願文巻十四281⑭）

文中の「心地」は「家室つまり妻に死なれて、中務卿親王の心が悲しみを募っている」という中務卿親王の心を示す意味に用いられる。なお、『久遠寺蔵本朝文粋』の音合符に関する先学研究[6]によれば、「心地」に付いている音合符は漢音よみを表わすものであることがわかる。漢音よみの「心地」は以上の考察で明らかになるように、「シムチ」となって濁らないのである。

(2) 正直心地爲国界無漏善根爲林聚若能了(ク)達(シヌレ)是理華池寶樹在胸中（西方極楽讃巻十二163②）

文中の「正直心地」は『華厳経』十地品に説く「正直心」のことをいうと思われる。なお、例(2)は対句形式となっている。「正直」に対して、「無漏」、「心地」に対して、「善根」と対応している。「善根」は佛教用語であるため、それに対応する「心地」も佛教用語と考えられるのが適当ではないか。これは「心地」に付いている呉音よみの音合符からも伺える。佛教用語としての「心地」は例(1)の俗世にいる一般の人間の心という意味に対して、佛教での心を示す意味として使用される。「心地」の呉音よみは例(1)の「シムチ」と濁らない漢音よみと異なって、「シムヂ」と濁るのである。

右の考察から『久遠寺蔵本朝文粋』に於ける「心地」の意味は次のように記述できよう。

(一)佛教での心

(二)一般の人間の心

と二つに大別できる。よみは「シムチ」という漢語よみと「シムヂ」という呉音よみとの二通りが存する。『延慶本平家物語』に於ける「心地」の「シムチ」の漢音よみと「シムヂ」の呉音よみとの

（表二）

考察対象	心地		
文献＼よみ	シムヂ	シムチ	計
意味	(一)佛教での心	(二)一般の人間の心	
遍照発揮性霊集	2	1	3
菅家文草 菅家後集		3	3
扶桑集		2	2
本朝文粋	1	3	4
本朝文集	2	2	4
合計	5	11	16

存在は『延慶本平家物語』が『久遠寺蔵本朝文粋』のような日本漢文を受容していることを反映することになる。右の意味分類に基づいて、同じ日本漢文の他の文献に於ける「心地」の意味を分類すれば、表㈡の通りになる。そのよみは『久遠寺蔵本朝文粋』の「心地」の意味とよみの対応関係に則って、漢音よみ「シムチ」と呉音よみ「シムヂ」となることが判明する。では、日本漢文の呉音よみと漢音よみを有する「心地」は何処に求められるのか、これについては後ほど触れることにする。

日本漢文に於ける「心地」は只名詞としてのみ使われる。和文に於ける「心地」という和語のようなサ変動詞形と敬意を示す接頭辞「御」の付く「御心地」形とは存していない。品詞から見れば、日本漢文の音よみの「心地」と和文の訓よみ「心地」との両者が異同を見せている。なお、両者の意味、即ち、和文の和語としての「心地」の意味と日本漢文の音よみの「心地」の意味を比較すれば、そのよみによる両者の意味上の相違点が顕著である。それは何に起因するのであろうか、後ほど触れることにする。

次に古記録に於ける漢字表記語「心地」のよみと意味を検討してみたい。古記録は漢字で書かれた文章である。したがって、古記録自体から「心地」のよみを究明するのは困難である。そこで、ここでは、次の方法でその「心地」のよみを判断するのが有効ではないかと考えられる。つまり、まず古記録の「心地」の意味を記述、分類する。さらにその意味を、右の考察で已に明らかになる二通りのよみを有する漢字表記語「心地」の意味と比較する。その意味の重りようによって古記録の「心地」のよみを判明する仕方である。

以下、古記録に於ける「心地」の意味について、『御堂関白記』を中心に検討する。

(1)十八日丙辰賭弓依咳病不参三度云々一度右勝二三度左勝云々不参右大将二十日戊午参大内差左丈座有召参上召硯等有叙位事随仰書了退下奏宣命草未事了前退出依不心地宜　(207⑦)

例(1)の「不心地宜」は十八日の「咳病」によるものと考えられる。つまり十八日の「咳病」が二十日にまた全愈していないため、彼是の政務に追われて、道長がつい気分が悪くなった。それで、政務が未了するうちにくりあげて退いたと解釈できる。例(1)の「心地」は道長の生理的気分を表わす意味として使われる。

(2)依上重悩給渡給其後渡法興院上達部十四人被来入夜参内是無便事也然而為違方忌依日来候也三日乙巳天気猶陰為職従一條通消息老者御心地従昨日重者　(67⑤)

例(2)の「心地」は(二日)の「重悩」と、また「心地」と共起する述語「重」とを考え合せると、道長の義母である穆子の病気(或いは病状)を示す意味と思われる。つまり穆子のご病気が昨日より重くなったということである。

(3)奏了退出次立文壺於中庭須召文人後早立而舞間不立之此間東泉渡殿三后有御対面具者感悦多端姫宮同御母々女三位同参候我心地不覚有生者也難盡言語未曽有事也　(182⑤)

例(3)は(1)(2)と異なって、「咳病」「重悩」という意味判断用の素材がない文脈である。むしろ、道長が一成功者としての心境を告白するという文脈と考えられる。つまり、道長は今日の自分の地位と皇后或いは皇太后になった三人娘の「三后有御対面」という我一族の栄華を極める場面に臨んでいる自分がいま生きているとは覚えないほどの感無量の心の状態を表わすことである。文中の「心地」は道長

の夢のような気持を示す意味と思われる。そういう心の状態を示「心地」は「覚」という人間の心の働きを表わす述語と共起しやすいであろう。

右の考察で、『御堂関白記』の「心地」の意味を次のように記述、分類できる。

㈠人間の生理的気分

㈡人間の病気（或いは病状）

㈢何かによって伴ってくる人の心の状態

と三つに大別できる。なお、同じ古記録の他文献に於ける「心地」を、右の分類に基づいて意味分類すれば、表㈢の通りになる。品詞としては、全部名詞であるが、右に挙げた『御堂関白記』の例の示す如く、敬意を表わす接頭辞「御」の付く「御心地」が見える。

右の考察によって得られた古記録に於ける漢字表記語「心地」の意味は已に音よみと判定された日本漢文の「心地」と異なって、「心地」と訓よみの和文の意味と重なっていると看取される。そこで、古記録の「心地」は和文のと同様、単に「ココチ」という和語の漢字表記であり、「ココチ」と読む可能性が十分有り得ると思われる。それは古記録の「心地」が和文のと同じく敬意を示す接頭辞「御」の付く「御心地」形が有って、音よみの日本漢文には見られないという品詞上の差異からも伺える。

古記録と和文との意味を比較すれば、確かに重なっているが、それは只和文の五つの意味の中の㈡㈢㈣と一致するだけであり、残りの和文㈠㈤の意味が古記録には検出できないようである。特に、和文で多用される㈤の意味が古記録には存していないことは同じ「心地」と言えども、和文と古記録という両文章ジャンルによる対照的

（表三）

考察対象	文献 ＼ 意味	小右記	権記	御堂開白記	左経記	春記	水左記	中右記	帥記	後二条師通記	永昌記	玉葉	台記	長秋記	兵範記	合計
心地	㈠人間の生理的気分	18	2	3	5	3	22	2	1			9	1	1		67
	㈡人間の病気（或いは病状）	28	3	12	9	2	44	9	1	1	1	26	2	5	7	150
	㈢何かによって伴ってくる人の心の状態			1												1
計		46	5	16	14	5	66	11	2	1	1	35	3	6	7	218

な異同を見せているとみられる。さらに、古記録と和文との意味が重なっているものを見よう。古記録では、㈠「人間の生理的気分」と㈡「人間の病気（或いは病状）」という両意味が「心地（こころち）」の中心的意味となっている。それに対して、和文では、㈠「何かによって伴ってくる人の心の状態」と㈡「その人が何かによって自然に伴ってくるそういうような感じがする」という両意味が中心的意味として用いられる。両者の意味上で現われている差はほかでもなくその文章ジャンルに起因するものであろう。

五、中国文献に於ける「心地」の意味

日本文献に於ける「心地」は何処から来たのか、殊に日本漢文の音よみの「心地」は何処に求められるか、それを究明するのには、中国語に於ける「心地」を考察する必要が生じてくるのである。次に中国語の「心地」の意味を検討しておく。

中国文献をジャンル別に分けると「散文」「韻文」「漢訳佛典」と三つに大別できる。「心地」はその三つのどのジャンルにも現われている。但し、その用例数から見れば、漢訳佛典の方が圧倒的に多いのである。それは中国語の「心地」の成立に関連することになる。これについては、別の機会で述べることにする。まず、漢訳佛典に於ける「心地」の意味を検討してみよう。

(1)心地者佛言三界之中以心爲主衆生之心猶如大地五穀五果從大地生如是心法生世出世善悪五趣三乗以是因縁三界唯心故名心地

（大正新修大藏経釋氏要覧91中③）

三界の諸々の現象が只心の働きによるもの、それは大地が五穀、五果を生ずるが如く、三界が心を本とするのである。故に心を心地と名づくという文意を成しているようである。文中の「心地」は佛教の中で佛教の特別な意味合いを持つという意味として用いられる。そういう佛教での心という意味の「心地」は佛教自体の変容、宗派などによって、その佛教の中での意味が変化を見せるが、これはあくまで佛教内部に止まるものである。いわば、「佛教で」という意味特徴が変わっていないことであろう。たとえば、天台宗の『天台戒疏上』においては、

三業之中意業爲主身口居次據勝爲心地

とある。文中の「心地」は三業の中の意業を示す意味として使用される。これは右の例(1)の「心地」の示す意味と異なっている。但し、両方とも「佛教で」用いられる「心」という意味特徴が同様である。よって、漢訳佛典に於ける「心地」は上位的に意味分類すれば、「佛教での心」と一つに記述できるようである。

次に散文、韻文に於ける「心地」の意味を考えてみたい。

(2)耳根得所琴初暢、心地忘機酒半酣

（白氏文集第五十七巻琴酒）

例(2)の「心地」はそれと共起する述語「忘」を合せて考えると、人間の思・考・感・覚などの働きをする心という意味を表わすとみられる。

(3)幹告以必有眞實心地刻苦工夫而後可、基悚惕受命於是隨事誘掖淵源之懿

（宋史列傳197儒林八12979）

例(3)の場面としては、父の伯慧が自分の上司である黄幹に子息―何基の師となってほしいと依頼したものである。文中の「心地」は何基の持つべき誠実なる心を表わす意味に用いられると思われる。例(1)の佛教での心に対して、例(2)(3)の「心地」は俗世にいる一般の人

間の心を表わす意味であると思われる。右の考察で、中国文献に於ける「心地」の意味は次のように記述できるのであろう。

㈠佛教での心

㈡一般の人間の心

と二つに大別できる。なお、右の三例の示す通り、中国文献の「心地」はいずれも名詞として用いられる。それのみならず、日本文献の古記録などに現れる敬意を示す接頭辞「御」の付く「御心地」も見られないのである。この点においては、日本漢文の「心地」と一致しているのである。右の分類に基づいて、他の中国文献に於ける「心地」の意味を分類すれば、表㈣のようになる。

（表四）

考察対象 ＼ 意味 ＼ 文献	心地 ㈠ 仏教での心	心地 ㈡ 一般の人間の心	計
韻文散文	1		1
杜詩			1
白氏文集歌詩		6	6
李頎詩		1	1
張継詩		1	1
韓偓詩（玉山樵人集）		1	1
齊己詩（白蓮集）		1	1
司空圖詩（司空表聖詩集）		1	1
何氏歴代詩話	1		1
蘇軾傳	2	1	3
宋史列傳儒林巻		1	1
朱子語類口語語彙	10		10
漢訳佛典 大乗本生心地観経及び他39文献	170		170
合計	172	25	197

右の考察で明らかになるように、日本漢文の「心地」は、その意味が中国語のと重なっている上、そのよみも音よみである。さらに品詞上での一致をも考え合せると、中国語出自の漢語であると判断される。なお、その日本漢文の「心地」の呉音よみと漢音よみとの二通りのよみが存することはほかでもなく中国文献の佛典と漢籍を各々受容したからであろうと思われる。『延慶本平家物語』に於ける「心地」の呉音よみと漢音よみの存在もその受容の継承であり、反映でもあろう。今回、管見に入った資料では、その一番早く受容した日本文献は弘法大師空海著『遍照発揮性霊集』であると思われる。その『遍照発揮性霊集』には、「佛教での心」を示す「心地」と「一般の人間の心」を示す「心地」が見える。それを挙げてみれば、

盧舎那如來千百億國ノ釋迦尊ト與四十心地ノ法門眷屬

（六地蔵寺蔵本『性霊集』巻八㊷）

抜ヌキイテ。心地之ノ鑒チ。字ニ折ヲリテ。六ニ書ノ。之ノ萃ニ楚ソヲ。（同右巻三㊱）

とある。周知のように、『遍照発揮性霊集』は空海が遣唐使の任を

遂げ、帰朝してからの著書である。したがって『遍照発揮性霊集』に現れている「佛教での心」の「心地」と「一般の人間の心」の「心地」は、恐らく空海が中国滞在中にそういう両意味を示す「心地」の中国文献に遭遇したことがあるから、それを受容したものであろうと推定される。「心地」という漢語は何時、何れの日本文献に現れ始めたのかという問題について、さらに検討する余地があるのである。それを今後の研究課題の一つにしておきたい。

日本漢文に於ける「心地」は中国語出自の漢語であることが右の考察で明らかになる。日本文献に於ける漢字表記語「心地」のよみの違いとそのよみによる意味の異同は和語と漢語との位相の差に起因するものであろうと考えられる。両者の表記は同じ「心地」というものの、一つは和語「ココチ」の漢字表記で、一つは漢語の「心地」である。

では、なぜ和語の「ココチ」に「心地」という漢語が充てられたのか、それは恐らく和語の「ココチ」が中国語の「心地」の示す「一般の人間の心」という意味を持っているため、中国語の「心地」に「ココチ」を充てたのであろうと考えられる。しかしながら、和語「ココチ」の意味は以上の考察で明らかになった如く、「一般の人間の心」という意味を除いて、また四つの意味を有している。だから、その四つの意味を表わす「ココチ」は「心地」という漢字で表記されても、本来の和語としての意味が変わらないものである。そのため、「ココチ」の漢字表記としての「心地」と中国語出自の漢語としての「心地」との間に意味の差異を見せているのである。両者が表記が一致しても、和文では、和語として、日本漢文では、漢語として使い分けられている。

また、古記録に於ける「心地」の意味を中国語のと比べれば、両者の相違がはっきりと現れる。だから、古記録の「心地」は中国語出自の漢語ではなく、和文と同じ、和語「ココチ」の漢字表記であると考えるのが適当であろう。つまり、古記録に混在する和語の一つである。(7)

六、『延慶本平家物語』に於ける「心地」の意味

以下、『延慶本平家物語』の漢字表記語「心地」の意味及びその「心地」の受容の有り方について検討を進めたい。まず品詞の観点から見れば、敬意を表わす接頭辞「御」の付く「御心地」の名詞形と「心地＋ス」というサ変動詞形が存する。特にサ変動詞形「心地ス」が多用されている。この点では、和文のと一致するのである。

(A)名詞（接頭辞「御」の付く「御心地」の4例も含む）　19例

(B)サ変動詞（「心地＋助詞類＋ス」の19例も含む）　65例

となっている。

次に『延慶本平家物語』の漢字表記語「心地」の意味を検討してみよう。

(1)冷キ木蔭ヲ行時ハ九品ノ鳥居ヲ只今トヲル思ナシ大キナル木ノ本ニ立寄テハ上品上生ノ心地發心門トモ觀念ス

（第一末85オ⑩）

文中の「心地」は已に問題点の例(1)として検討してみたところ、呉音よみの佛教用語であることが明らかになる。場面としては、熊野権現を信じる康頼が油黄嶋でそれに参詣できなく、心の中で信仰するものである。それで「涼しい木蔭を通る時は九品の鳥居を通ると思いなし、大きい木のもとに立ち寄れば、上品上生心地の発心門に

立ち寄ると観念する」ということになる。「心地」は極楽の九階級の最高位の心を示す意味として用いられる。つまり、佛教の中で用いられる心を表わす佛教用語である。中国語と日本漢文の「佛教での心」という意味と重なる。そのよみを合せて考えると、例(1)の「心地」は中国語出自の漢語であると判断される。

(2) 一ニ旦背ヲ世之愛ヘニ已閣ク心地之月ニ百年偕ニ年之契リ不異ナラ夢露之花ニ

(第二末7オ④)

文中の「心地」は右の問題点の例(2)として検討したところ、漢音よみであることが明らかになる。場面は夫に死なれた文学という尼の悲しみをいうものである。夫の死によって生じてくる悲しみに、月に喩えられた心が闇くなる。「心地」は一般の人間の心を表わす意味に用いられる。その漢音よみも考え合せれば、例(2)の「心地」は中国語出自の漢語であると考えられる。

(3) 今ハ我身ノ御上ト思食ス日数ノ経ルマ、ニハ都ノ遠サカリ行モ心細ク況ン一宮ノ御事思食出ルニ付テハイト、消入御心地ナリ

(第一末107ウ④)

例(3)は新院が讃岐国に移された時の気持をいう場面である。文中の「心地」は新院が一宮のことを思われる時の「消入る」という心の状態を示す意味であると思われる。敬意を示す接頭辞「御」の付く「御心地」という形も合せて考えれば、例(3)の「心地」は和文の「ココチ」の「何かによって伴ってくる人の心の状態」という意味と重なっているように思われる。「心地」は和語「ココチ」の漢字表記である。

(4) 日ヲ経ツ、思食沈ミテ供御モハカ〳〵シクマヒラス御寝モ打解テナラス常ハ御心地ナヤマシトテ夜ノオト、ニノミオハシマセハ

(第二本102ウ⑧)

「御心地」の前接文の「気が鬱いでよく寝られない」ことと、「御心地」と共起する「ナヤマシ」という「気分がわるい」意味を表わす述語とを合せて考えると、例(3)の「御心地」は法皇の生理的気分を示す意味であると考えられる。つまり法皇は御気分がわるいということを表わすのである。和語の「ココチ」の意味と一致するとみられる。

(5) 入道相国例ナラヌ心地出来タルヨシ有ケレハケシカラシト云人モ有ケリ又年来モ片時モ不例ノ事オワセサリツル人ノカヤウニオワスレハ(略)廿八日ニハ太政入道重病ヲ受給ヘリトテ

(第三本37オ⑥)

例(5)は太政入道が病気になった場面である。「心地」の後接文の「年来モ片時モ不例ノ事」と「重病ヲ受ケ給ヘリ」とを合せて考えれば、文中の「例ナラヌ心地出来タル」は太政入道がいつもと違った病気(或いは病状)になったという意味であろうと思われる。例(5)の「心地」は和文の「ココチ」の示す「人間の病気(或いは病状)」という意味と重なっていると考えられる。

(6) 祭文讀畢リニケレハイツヨリモ信心肝ニ銘シ五躰ニ汗イヨタチテ櫨現金剛童子ノ御影響忽ニアル心地シテ山風スコク吹ヲロシ木々ノ梢モサタカナラス木葉カツチリケルニ

(第一末91オ⑤)

例(6)は康頼が熊野権現を祭る文を読み終わった後の場面である。文脈に即してみれば、その祭文を読み終わったら、いつもより信心が肝に銘じ、五躰にも汗をかいてくる。さらに山風がつよく吹きおろし、木々の梢が揺れ始め、木葉がばらばらと落ちるようになる。そ

ういう突然な変化に、康頼は自然に権現金剛童子の影響が忽に現れているような感じがするというふうに解釈できる。例(6)の「心地シテ」は和文の「ココチス」の示す「その人が何かによって自然に伴ってくるそういうような感じがする」という意味と同じく使用されている。

右の考察で、漢字表記語「心地」の意味を次のように記述、分類できよう。

㈠佛教での心
㈡一般の人間の心
㈢何かによって伴ってくる人の心の状態
㈣人間の生理的気分
㈤人間の病気（或いは病状）
㈥その人が何かによって自然に伴ってくるそういうような感じ（がする）

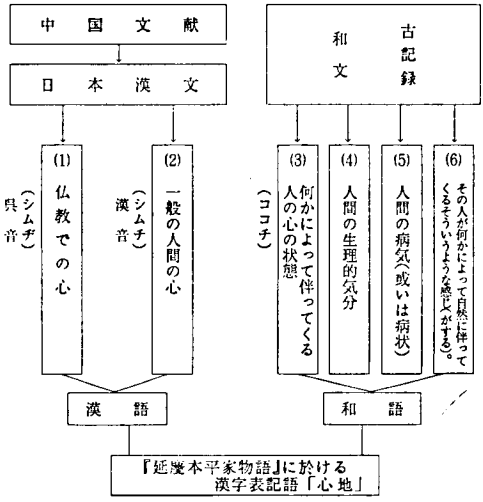
と六つに大別できる。それに基づいて、残りの『延慶本平家物語』の漢字表記語「心地」の意味を分類すれば、表㈥のようになる。表㈥の示すが如く、『延慶本平家物語』に於ける漢字表記語「心地」は一つが中国出自の漢語で、音よみであり、一つが和語で、「ココチ」と訓よみするといった素姓を持つことが明らかになる。両者の位相の差によって、よみも意味も異なっているのである。

さて、なぜ、『延慶本平家物語』に於いては、一つの漢字表記語「心地」は和語と漢語との二面性を有しているのか、それは次の二点に起因するのではないかと考えられる。一つは和語「ココチ」と「心地」との対応関係が定着する。いわば、「ココチ」が「心地」の定訓となるということによって、「心地」という漢語と同じように用いられ得るからであろう。その読みわけは意味によるようである。もう一つは和漢混淆文という文体を形成する語彙によると思われる。和漢混淆文の語彙とは和文調、漢文訓読調を形成する用語、それに当時の俗語ということになるといわれる。[8] これらの混淆によって和漢混淆文という文体が形成される。漢字表記語「心地」が漢語と和語との二性格を持つのは和漢混淆文である『延慶本平家物語』を成す語彙の多様性の反映であろう。但し、ここで注目を要することがある。従来いわれる和漢混淆文に於ける和文語と漢文訓読語はそれぞれ語形が異なるものである。しかしながら、『延慶本平家物語』の「心地」のように、一つの同語形の語に和語と漢語という二性格が存するということは従来いわれる和漢混淆文に於ける語形の異なる和語、漢語と相違点を見せている。

右の考察によって、『延慶本平家物語』に於ける漢字表記語「心地」は前の時代の文献を受容した上で形成されたものであることが明らかになる。その受容関係を図示すれば、次の図のようになるであろう。

（表五）

考察対象	よみ	意味	延慶本平家物語
心地	シムチ	㈠仏教での心	1
	シムチ	㈡一般の人間の心	1
	コココチ	㈢何かによって伴ってくる人の心の状態	11
	コココチ	㈣人間の生理的気分	3
	コココチ	㈤人間の病気（或いは病状）	3
	コココチ	㈥その人が何かによって自然に伴ってくるそういうような感じ（がする）	65
計			84



七、むすび

一つの漢字表記語に和語と漢語との二面性が含まれ、またその位相によるよみも意味も異なる事象は『延慶本平家物語』の言語を研究する上で注目すべきことではないかと思われる。そういう個々の漢字表記語の素姓を解明するのは『延慶本平家物語』の言語構成を研究するのには有意義なことと成り得よう。

(一)注

(1)佐藤喜代治「平家物語と記録体の文章」(『日本文章史の研究』昭41・明治書院)

佐藤武義「『平家物語』における漢語の研究」(『宮城教育大紀要』5、昭46・3)
佐藤喜代治「近代の語彙1」二「平家物語」の語彙(『講座国語史3語彙史』昭46・大修館書店)
桜井光昭「『平家物語』に見る和漢混淆現象」(『国語語彙史の研究五』昭59・5、和泉書院)
山本真吾「平家物語に於ける漢語の受容に関する一考察——「上皇御所」の呼称をめぐって——」(『国語学』157集、1989・6・30、国語学会)
(2)水原一「『延慶本平家物語』論考」(昭54・6・24、加藤中道館)
(3)柏谷嘉弘「身延本本朝文粋の漢語」(『松村明教授古稀退官国語研究論集』昭61・10、明治書院)
山本秀人「音合符における漢音、呉音の区別について——久遠寺蔵「本朝文粋」を中心に——」(昭61・11、国語学会中国四国支部第三十一回大会研究発表)
(4)注(1)をご参照ください。
(5)石塚晴通「『図書寮本日本書紀』」(昭55・3、美季出版社)
(6)注(3)をご参照ください。
(7)峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』(昭61、東京大学出版会)第二章古記録の語彙
(8)築島裕「和漢混淆文」の項(『国語学大辞典』昭55、東京堂)

(二)検索文献

(1)中国文献

A韻文

楚辭、毛詩（哈佛燕京学社引得）、嵇康集（嵇康集校注本）、阮籍集（阮籍上下本）、陸機詩（陸士衡注本）、陶淵明詩文索引（淵江忠道編）、謝靈運詩（謝康楽詩注本）、謝宣城詩（万有文庫本）、全漢詩索引（松浦崇編）、玉臺新詠索引（小尾郊一・高志真夫編）、全漢三国晋南北朝詩上・下（丁福保編）、張籍歌詩（張籍詩集本）、杜詩（宋刻本）、陳子昂詩（陳子昂集本）、李賀詩（李長吉歌詩四巻）、温庭筠歌詩（四部備用本）、杜牧詩（樊川詩集注本）、王維詩（趙松谷本）、李白歌詩（繆本）、白氏文集歌詩索引（平岡武夫・今井清編）、柳宗元歌集（宋世綵堂本）、孟浩然詩（四部備用本）、韓愈歌詩（廖本）、何氏歷代詩話（艾文博主編）、漢詩大観（井田書店）

B散文

論語引得・孟子引得・春秋経伝引得・爾雅引得・周易引得・荀子引得・墨子引得（以上哈佛燕京学社引得特刊）、禮記引得（哈佛燕京学社引得）、管子引得（中文研究資料中心研究資料叢書）、老子索引（豊島睦編）、荘子引得（弘道文化事業有限公司編）、国語索引（東方文化学院京都研究所編）、列子索引（山口義男編）、儀禮・左傳・公羊傳・穀梁傳（以上十三経注疏）、山海経通検（中法漢学研究所）、尚書（相墓本）、戦国策（土禮居仿宋本）、論衡（四部叢刊本）、淮南子・呂氏春秋（四部叢刊本）、潛夫論（四部備要本）、曹植文集（法蘭西学院漢学研究所）、史記索引・漢書索引（二十四史索引之一、之二）、黄福鑾編）、後漢書語彙集成上・中・下（藤田至善編）、三国志及裴注綜合引得（哈佛燕京社引得）、文選索引（斯波六郎編）、文心雕龍索引（岡村繁編）、貞観政要（貞観政要定本）、宋史列傳儒林巻（中華書局）、世説新語索引（高橋清編）、朱子語類口語語彙（塩見邦彦編）、資治通鑑（山名本）

C漢訳佛典

法華経一字索引付開結二経（東洋哲学研究所編）、一切経音義索引（沼本克明・池田證壽・原卓志編、古辞書音義集成19）、大正新修大藏経索引

Dその他

佩文韻府（王雲五編）、辞源（商務印書館）、中文大辞典（中国文化研究所出版）

(2)日本文献

Ⅰ奈良時代語文献

古京遺文（狩谷棭齋）、続古京遺文（山田孝雄・香取秀真）、平城宮木簡一・二、藤原宮木簡、寧楽遺文上・中・下、大日本古文書（編年一～二五、家わけ十八、東大寺文書）、法華義疏（伝聖徳太子筆）、万葉集（岩波日本古典文学大系）、古事記（岩波日本思想大系）、日本書紀（岩波日本古典文学大系）、懐風藻（岩波日本古典文学大系）、風土記漢字索引（植垣節也編）

Ⅱ平安鎌倉時代語文献

A和文

竹取物語・伊勢物語・土左日記・平中物語・大和物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・和泉式部日記・紫式部日記・夜の寝覚・狭衣物語（以上、岩波日本古典文学大系）、新訂新版かげろふ日記索引・宇津保物語本文と索引・大鏡の研究・栄花物語本文と索引

B日本漢文

文華秀麗集・菅家文草・菅家後集・日本霊異記（岩波日本古典文学大系）、遍照発揮性霊集・江都督納言願文集（六地蔵寺本）、本朝文粋（久遠寺本）、本朝続文集・朝野群載（新訂増補国史大系）、高山寺本表白集（高山寺資料叢書第二冊）、凌雲集・経国集・都氏文集・田氏家集・雑言奉和・粟田左府尚歯会詩・扶桑集・本朝麗藻・江吏部集・侍臣詩合・殿上詩合・本朝無題詩・法性関白集（以上、群書類従第六輯）、三教指帰（天理図書館）、本朝文集（新訂増補国史大系）

C古記録

貞信公記・九暦・小右記・権記・御堂関白記・左経記・春記・水左記・中右記・帥記・後二条師通記・永昌記・長秋記・玉葉・台記・兵範記・花園天皇宸記・伏見天皇宸記（以上、大日本古記録・史料大成）、吾妻鏡（新訂増補国史大系）、雲州往来享禄本研究と索引・本文研究編、和泉往来（京都大学国語国文資料叢書）、高山寺本古往来（高山寺資料叢書第二冊）、東山往来・菅丞相往来・釈氏往来・十二月往来・貴嶺問答・尺素往来・雑筆往来・異制庭訓往来（以上、日本教科書大系往来編）、将門記（真福寺本・勉誠社文庫131）、玉造小町壮衰書（山内潤三・木村晟・杤尾武編輯）、日本往生極楽記・大日本国法華経験記（岩波日本思想大系）、浦島子伝・富士山記・続浦島子伝・新猿楽記・傀儡記・遊女記・狐媚記・暮年記（以上、群書類従第六輯）

〔付記〕本稿は、平成二年度広島大学国語国文学春季研究集会に於いて口頭で発表したものをもとに加筆したものです。席上、貴重な御助言を賜わりました諸先生方に記して御礼申し上げます。また論を成すにあたり、小林芳規先生より終始暖い御指導を賜わりました。心より感謝申し上げます。

――本学大学院博士課程在学――